

## ディミトリ・ティオムキン——ウクライナが生んだハリウッドの巨匠

吉田英生（1978/S53卒）

今般ロシアがウクライナ侵攻に至った背景については、両国だけでなく世界が複雑に関係する難しい問題です<sup>1</sup>ので安易には言及できませんが、その結果としてウクライナ国民と両国の兵士たちの甚大な犠牲、さらに今後世界全体にも押し寄せるかもしれない種々の危険を考えると日々暗澹たる気持ちになります。

先月号では、せめて音楽の点からウクライナを話題にしたいと考えましたが、クラシック音楽に注意がかたよってしまい、ウクライナ生まれの映画音楽の巨匠ディミトリ・ティオムキン(1895–1979) <https://dimitritiomkin.com/> を挙げるのを忘れていました。といっても、若い方々にはほとんど馴染みがないかもしれませんが、手がけた映画音楽は、『白昼の決闘 Duel in The Sun』(1946)、『赤い河 Red River』(1948)、『真昼の決闘 High Noon』(1952)、『紅の翼 The High and the Mighty』(1954)、『ジャイアンツ Giant』(1956)、『OK牧場の決闘 Gunfight at the O.K. Corral』(1957)、『老人と海 The Old Man and the Sea』(1958)、『リオ・ブラボー Rio Bravo』(1959)、『ローハイド Rawhide』(CBS TV 1959–1965)、『アラモ The Alamo』(1960)、『ナバロンの要塞 The Guns of Navarone』(1961)、さらにハリウッド映画でなくソ連映画ということもあってあまり知られていないようですが『チャイコフスキー Tchaikovsky』(1970)など、枚挙にいとまがありません。

ティオムキンはロシアのサンクトペテルブルク<sup>2</sup>音楽院で、やはりウクライナ出身のブルーメンフェルト(1863–1931)<sup>3</sup>と、グラズノフ(1865–1936)<sup>4</sup>からクラシック音楽のピアノや作曲を学びました。

なお1999年に、米国郵便は“Legends of Hollywood Composers”と題して6人の映画音楽の巨匠——生誕順に、マックス・スタイナー(1888–1971)、ディミトリ・ティオムキン、エーリヒ・ヴォルフガング・コルンゴルト(1897–1957)、アルフレッド・ニューマン(1901–1970)、フランツ・ワックスマン(1906–1967)、バーナード・ハーマン(1911–1975)の記念切手を発行しています。



<sup>1</sup> ロシア文学を専攻する友人が教えてくれた塩川伸明氏の論考「ウクライナ戦争・再論(2022年4月17日)」からは、両国の歴史から最近の動向までを含め多くを学んだことを付記します。  
<http://www7b.biglobe.ne.jp/~shiokawa/notes2013-/UkrainianWar.pdf>

<sup>2</sup> 第一次世界大戦中1914–1924はペトログラード、ソ連時代はレニングラードと呼ばれました。

<sup>3</sup> リムスキー＝コルサコフ(1844–1908)の弟子であり、ホロヴィッツ(1903–1989)はキーウ音楽院での教え子でした。

<sup>4</sup> 同様にリムスキー＝コルサコフの弟子であり、プロコフィエフ(1891–1953)やショスタコーヴィチ(1906–1975)は教え子でした。

筆者は学生時代、ヘミングウェイの『老人と海』を、新潮文庫(福田恆存の名訳)やPenguin Booksの原文で読み、さらにテレビで放映された映画に魅せられて、サウンドトラックのLPレコードを手しティオムキンの名前を知るようになりました。『老人と海』は映画の大部分が老人の独白だけなので、とりわけ音楽が重要な役割を果たします。今回、DVDで久しぶりに見直してみて、ティオムキンの音楽はそのような映像を極めて効果的に支えていることに感動を新たにしました。



♪♪♪♪

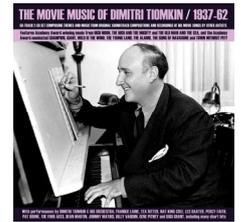
それにしても、ティオムキンが音楽を担当した映画の中にはジョン・ウェインなどの名優が活躍する西部劇がたくさんあります。そこでChristopher Palmerによる伝記“*Dimitri Tiomkin: A Portrait*”(1984)に目を通して見たところ、以下のような記述があつて、腑に落ちました。



コサック(ウクライナ語ではコザーク)で、ウクライナ史最大の英雄 ポフダン・フメリニツキー (1595-1657) 写真は wikipedia より

After all, he had reason to feel an empathy for the American West. He came from a Big Country too, and in its bigness—particularly its vast all-embracingness of sky and plain—he must have seen a reflection of the steppes of his native Ukraine. So the cowboy becomes a mirror-image of the Cossack: both are primitives and innocents, etched on and dwarfed by a landscape of soul-stirring immensity and rugged masculine beauty.

とはいえ、はたしてティオムキン自身がそんなことを明確に述べたことがあったのかと確認したかったところ、たまたま今年2月に発売されたばかりの“*The Movie Music of Dimitri Tiomkin / 1937-62*”というCDのライナーノートに以下の言葉を発見できました<sup>5</sup>。



“A steppe is a steppe is a steppe... . The problems of the cowboy and the Cossack are very similar. They share a love of nature and a love of animals. Their courage and their philosophical attitudes are similar, and the steppes of Russia are much like the prairies of America.”

戦後生まれで平和ボケした筆者には、文字どおり命がけで祖国を守ろうとするウクライナ国民の気概に圧倒されるばかりですが、ウクライナ国歌にも

「我らは自由のために魂と身体を捧げ、兄弟たちよ、  
我らがコサックの氏族であることを示そう」

とあるように、15世紀ころからの自治的な武装集団であるコサックの血が受け継がれているのですね。ウクライナ国民の愛国心と誇りと勇敢さには頭が下がりますが、徹底抗戦の結果、犠牲が日々拡大している現実は痛ましい限りです。もしティオムキンがこの状況を知ったなら、どんな音楽を奏でているのでしょうか。

<sup>5</sup> 前ページの脚注1で紹介した友人は映画にも造詣が深く、本件を話したら次のコメントが返ってきました。「Wild West/Westernと東ウクライナ/コサックの類似でも説明できなさそうな、いかにもアメリカの市民社会的(?)なフランク・キャプラの作品の音楽を手がけていることは、今さらながら驚きであり、ティオムキンの幅の広さなのでしょう。(中略)“A steppe is a steppe is a steppe...”という表現は、ガートルード・スタインの有名な詩行“a rose is a rose is a rose”を踏まえているのでしょうか。」——なるほどそういうものか、自分の見方はいかにも一面的で浅いな、とも思いしらされた次第です。